

香川大学における地域理解教育の成果の検証

清 國 祐 二

はじめに

研究の方法

テキストマイニングによる分析結果

おわりに

はじめに

香川大学では、教育改革の一環として平成28年度より地域理解教育の一層の浸透を図るため、全学共通教育の中に主題Cを新規に設け、その理念として「地域の現状や課題を把握し、問題解決のための基礎的教養を得る授業群です。歴史・地理・文化・自然・民俗・産業・経済・福祉・医療・教育等、多方面に渡る視点から地域をよりよく理解し、本学が立地する地域（主に香川）に関する知識や関心、地域に関わろうとする意欲を高めることが狙いです。」と明記した。地域に根ざした人材育成を強く意識していることが窺える。

新設時（平成28年度）の状況であるが、主題Cは講義型科目が10科目開講（当時は Semester 開講、現在はクォーター開講）されており、そのうち7科目がeラーニング科目であった。実践型科目（フィールドワーク型科目）は7科目の開講となっていた。しかしながら、地域理解教育の拡充と定着を教育改革と連動させようとする、全学必修となる基礎科目の開設が必須条件であった。そこで大学教育基盤センター地域教育部会議で度重なる議論の末、主題C-基礎科目「地域と香川大学」（クォーター開講、1単位）を、eラーニング形式で実施することとした。

本稿は、地域理解教育の導入科目となる「地域と香川大学」の教育効果を測定することを試みるものである。eラーニングという形式上、学習への取り組みが受講生の自律性や主体的に依存せざるを得ないこともあり、精緻な効果測定が困難であることが予想される。そこで、ひとつの手がかりとして、本研究では最終回に課す最終レポートを題材に、テキストマイニングによる分析を行うこととした。平成29年度は最終レポートに3つのキーワードを入れるよう条件付けしたが、平成30年度にはその指示は敢えて外している。単位認定に直結するレポートであることがどれほど記述の内容に影響を与えるのかについて、見極めは困難であるが、ひとまずここを出発点として、継続的に研究を深めていきたい。

研究の方法

「はじめに」で示したとおり、分析の素材として、学生の提出した最終レポートを利用する。学生がレポートに取り組むにあたり、平成29年度には、①授業内容を振り返ること、②授業内容を踏まえてまとめること、③「地域理解」「学生」「未来」の3つのキーワードを含むこと、④600字以上700字以内で記述すること、の4条件を付している。平成30年度は③の条件を除く、3条件を付している。レポートによって

はその記述内容に学生自身が特定されるものも含んでいるが、統計的に処理されるため、個人や地域が特定されることはないことは確認済みである。

今回は、試論として取り組むため、分析に係る時間への配慮もあってデータ数を制限して実施した。分析対象として地域の産業にも密接に関わり、地域への親和性も高いであろう農学部の学生を抽出しているが、他学部の学生との差異があるかどうかについては、今後継続して研究を進めたい。分析対象とした学生の属性は表1の通りである。平成29年度入学生より必修化された科目であるため、同年度は1年生のみ、平成30年度は再履修の2年生が含まれている。

表1：分析対象とした学生（農学部）の属性

年 度	学 年	男 子	女 子	合 計
平成29年度	1 年 生	59名	67名	126名
平成30年度	1 年 生	59名	63名	122名 (129名)
	2 年 生	6 名	1 名	7 名 (129名)

課題レポートの分類や分析については、テキストマイニング・ソフトウェアの“TRUE TELLER ver.6”（野村総合研究所）を用いた。テキストマイニングとは、テキスト（文章）をマイニング（発掘）することであり、定型化されていない文章の集まりの中から価値ある情報を掘り出すといった意味が込められている。その際に、自然言語解析の手法を用いて単語やフレーズに分割された言葉を、出現頻度や相関関係などから有用な情報を抽出するシステムとなっている。

テキストマイニングによる分析結果

1) 平成29年度の課題レポートの分析結果

基礎分析として、品詞別単語使用頻度（出現数）とレポート数（件数）を出してみた。書き込みを分析して抽出された名詞、形容詞、動詞のうち、意味をもたない単語を削除した上で、上位20位までを載せたものが表2である。平成29年度に限っては、『『地域理解』『学生』『未来』の3つのキーワードを含むこと』を課題レポートの条件としていたため、名詞の上位4つはそのワードで占められている。それを除けば、「香川県」「香川大学」「私」が上位にランクインしている。

「香川県」は「地域」との親和性の高い言葉であり、授業のコンテンツでも頻出しているため妥当なところであろう。「香川大学」が突出しているのは、ひとつには自校教育（香川大学の歴史や特性を知ること）も本授業のねらいであること、もうひとつには香川大学の学生の活躍（現役学生もOBも）がコンテンツ化されていることが影響を及ぼしていると考えられる。

形容語（形容詞と形容動詞が同一のカテゴリとなっているため、ここでは形容語に統一する。）で見ると、「多い」「様々だ」「大切だ」「良い」「積極的だ」「重要だ」というポジティブな形容語が多く用いられている。動詞では、「ある」「思う」「知る」「考える」「学ぶ」「感じる」が多く用いられている。「知らない」も上位に位置づいているが、県内出身者であっても地元を詳しく知らない実態の中で、ましてや県外出身者はほとんど予備知識もなく進学してきているので、不思議ではない。

名詞、形容語、動詞を独立した順位で見ただけでは、それらの言葉がどのような文脈で使われているかが定かではない。修飾語は削ぎ落として、体言と用言の関係をシンプルに見ていく必要がある。それが「係り受け」であり、次の段落で見ていきたい。

表2：平成29年度の課題レポートに見られる品詞別単語使用頻度

	名詞	出現数	件数	形容詞	出現数	件数	動詞	出現数	件数
1	地域	800	126	多い	73	50	ある	352	116
2	理解	172	124	様々だ	64	44	思う	424	114
3	学生	297	123	大切だ	44	38	知る	274	107
4	未来	167	121	良い	47	34	考える	166	79
5	香川大学	328	108	積極的だ	34	29	学ぶ	156	75
6	香川県	396	101	重要だ	35	28	感じる	137	74
7	私	246	90	ない	31	25	知らない	112	73
8	授業	205	82	必要だ	35	25	深める	68	49
9	香川	224	79	いい	36	24	持つ	53	45
10	自分	165	73	深い	30	23	行う	73	44
11	人	148	68	若い	30	22	通す	57	43
12	魅力	135	65	大きい	31	22	見る	52	40
13	活性化	88	59	よい	24	20	受ける	67	40
14	大学	86	58	有名だ	26	20	住む	53	40
15	プロジェクト	95	57	少ない	24	18	する	50	38
16	活動	114	56	何か	13	12	貢献する	53	38
17	今	89	55	強い	15	12	参加する	49	35
18	歴史	83	52	長い	14	12	行われる	48	34
19	問題	87	47	しっかり	12	11	関わる	40	34
20	人口	77	45	興味深い	12	11	残る	37	32

主語・目的語と述語の「係り受け」の関係を捉えることで、学生の使っている言葉の意図をくみ取ることが可能となる。本授業を通して、表3より、「理解を深める（理解が深まる）こと」「魅力を知ること」「香川県にはあること」「香川県のことを知らないこと」「地域に貢献すること」などの気づきがあったことが窺える。もちろん、課題レポートであるがゆえに、聞き心地の良い表現を心がけて使っている向きもあろう。しかし、授業がなければこのような気づきさえなかったことが容易に想像できる。本授業が地域への愛着を学生に強制する手段でないことは自覚しているつもりであるが、他方で香川という地域を学ぶことによって、学生自身が生まれ育った地域も含めて相対的に地域を理解する感覚を身につけて欲しいと考えている。

本レポートはキーワードが指定されているところに特徴があるが、それらキーワードはどのような述語と組み合わせられているのだろうか。20位までを見てみると、地域に関しては、「地域を知る」「地域に貢献する」「地域に関わる」「地域を理解する」などがあがっている。学生に関しては、「学生が知る」「学生にできる（こと）」「学生が深める」「学生が貢献する」などがあがっている。未来に関しては、「未来を考える」「未来を担う」「未来を支える」となっている。

2) 平成30年度の課題レポートの分析結果

平成30年度の課題レポートも同様に品詞別単語使用頻度（出現数）とレポート数（件数）を出してみた。（表5を参照のこと。）平成29年度とは異なり、キーワードは指定しておらず、学生は比較的自由にレポートの作成ができたはずである。しかし、実際は別の意味で文章の定型化が起こっており、それほど大きな

表3：主語・目的語と述語の係り受け

	主語・目的語	述語	件数
1	理解	深める	46
2	授業	受ける	24
3	魅力	知る	23
4	授業	学ぶ	21
5	香川県	ある	20
6	香川県	知らない	20
7	地域	知る	19
8	香川県	知る	17
9	地域	貢献する	17
10	香川大学	学ぶ	15
11	授業	通す	14
12	人	多い	14
13	私	受ける	13
14	未来	考える	13
15	魅力	伝える	13
16	香川	知る	12
17	香川大学	ある	12
18	地域	関わる	12
19	未来	担う	12
20	魅力	ある	12

表4：キーワードと述語の係り受け

	キーワード	述語	件数
1	地域	知る	19
2	地域	貢献する	17
3	未来	考える	13
4	地域	関わる	12
5	未来	担う	12
6	学生	知る	11
7	地域	ある	11
8	地域	理解する	11
9	学生	できる	10
10	学生	深める	10
11	学生	貢献する	9
12	地域	根ざす	9
13	地域	住む	9
14	未来	支える	9
15	地域	学ぶ	8
16	地域	活性化する	7
17	学生	ある	6
18	学生	考える	6
19	学生	持つ	6
20	地域	持つ	6

差異が見られたわけではなかった。

表5の通り、「地域」「香川大学」「香川県」「私」「香川」などが上位を占めている。科目名が「地域と香川大学」であることがレポートの書き出しに影響を与えてしまったようである。同じく「私」が多かったのは、本授業で学ぶ対象である「地域」と「香川大学」とに学生自らが正面から向き合うことが求められ、そのため一人称で書き始める学生が多かったからであろう。

形容語と動詞では、平成29年度のものとは大きく変わることはなさそうだ。ここでも、「様々だ」「良い」「多い」「大きい」「大切だ」「積極的だ」「重要だ」というポジティブな形容語が多く用いられている。一方で「ない」「少ない」なども少数ながら上位の方に入っている。動詞でも、「ある」「思う」「知る」「考える」「学ぶ」「感じる」が多用されており、前年度とほぼ変わらない結果が得られた。

続いて、主語・目的語と述語の「係り受け」の関係を捉えたい。「地域理解」「学生」「未来」のキーワードを外したことで、平成29年度と比較すると、その表現の地図が変化していることがわかる。「地域に貢献すること」「香川県にはあること」「香川県のことを知らないこと」は共通するものの、「授業を通して」「授業で学ぶ」「授業を受ける」「香川大学を（で）学ぶ」「問題を抱える」などが上位を占めている。授業という枠組みが一定学生を縛っているように感じられる。意識の変容や行動の変化につながっていくかどうか、不安に思うところである。

また、上述の通り、今回の課題レポートはキーワードが指定されていないため、単純には比較できない。さりとて、何か手がかりは欲しいところである。そこで、前回設定した「学生」というキーワードを「私」「自分」と同意語と解釈し、係り受けを抽出してみた。「私の所属する」「私が学ぶ」「私が(に)残る」「私

表5：平成30年度の課題レポートに見られる品詞別単語使用頻度

	名詞	出現数	件数	形容詞	出現数	件数	動詞	出現数	件数
1	地域	616	121	様々だ	96	63	ある	389	122
2	香川大学	377	110	良い	55	41	思う	411	110
3	香川県	362	104	多い	48	39	知る	265	100
4	私	259	102	ない	34	30	学ぶ	188	87
5	香川	219	81	大きい	40	30	感じる	152	80
6	授業	171	73	大切だ	38	28	考える	138	73
7	魅力	132	65	積極的だ	31	27	行う	84	56
8	大学	108	63	少ない	29	26	知らない	87	56
9	問題	137	63	よい	29	25	通す	62	52
10	学生	109	60	重要だ	29	24	持つ	71	50
11	自分	121	60	深い	31	23	受ける	60	43
12	人	108	58	詳しい	22	19	分かる	57	37
13	講義	142	57	いい	26	18	貢献する	48	36
14	歴史	90	56	必要だ	21	16	見る	48	34
15	活動	112	53	身近だ	14	14	する	42	33
16	今	71	50	多く	16	14	参加する	44	33
17	人口	97	50	有名だ	21	14	聞く	44	33
18	高齢化	62	45	強い	14	13	残る	38	31
19	プロジェクト	87	44	大事だ	14	13	住む	37	26
20	大学生	57	42	深刻だ	12	12	進む	36	26

表6：主語・目的語と述語の係り受け

	主語・目的語	述語	件数
1	地域	貢献する	23
2	授業	通す	22
3	香川大学	学ぶ	20
4	問題	抱える	20
5	香川大学	ある	19
6	授業	学ぶ	19
7	授業	受ける	19
8	香川県	ある	18
9	講義	通す	17
10	香川県	知らない	17
11	歴史	学ぶ	17
12	講義	受ける	15
13	よい	思う	13
14	魅力	知る	13
15	問題	ある	13
16	活動	行う	12
17	活動	参加する	12
18	講義	学ぶ	12
19	私	所属する	11
20	授業	知る	11

表7：キーワードと述語の係り受け

	キーワード相当	述語	件数
1	地域	貢献する	23
2	私	所属する	11
3	地域	学ぶ	10
4	地域	知る	10
5	私	学ぶ	9
6	私	残る	8
7	私	思う	8
8	私	受ける	8
9	私	通す	8
10	地域	関わる	8
11	私	考える	7
12	私	住む	7
13	地域	ある	7
14	地域	受講する	7
15	私	感じる	6
16	私	知る	6
17	私	知らない	6
18	自分	できる	6
19	地域	根差す	6
20	地域	住む	6

が（は）思う」「私が（は）受ける」などが並んだ。「学生」は一般的な名詞であることで、結びつく動詞には積極性や主体性が読み取れる語があがっているようだ。一方、「私」はまさに私であるために、直接的な意識や行動の変容につながりそうな動詞とは結びついていない。

「私」は「学生」であることに違いはないが、「学生」は必ずしも「私」ではないということの意味しているのであろうか。この結果については、より定性的な分析が必要となるが、仮説であるとしてもとても興味深い結果となった。

おわりに

本稿は、香川大学において実施している地域理解教育の成果を測定しようとする試みであった。対象となる授業科目は、eラーニングの方法を用いて開講する「地域と香川大学」（主題C－基礎科目）であり、全学共通教育における必修科目でもある。単位認定に係る最終レポートという制約はあるものの、地域を学び、理解を深めることに、ポジティブな受け止めをしていることは、高い頻度で使用される形容語から明らかとなった。一方、一般論としての「学生」を主語に用いれば積極的な動詞を選択する傾向にあるのだが、「私」が主語になるとトーンダウンしてしまう傾向が否めない。生活基盤である地域に根ざして、持続可能な地域づくりへの当事者意識を持ち、実際に地域の支え手として行動できるよう成長したかどうかについては確信に至っていない。この導入科目が主題C－実践型科目や学部専門科目のフィールドワークやインターンシップへとどう繋がっていくのか注目していきたい。最後に、本稿では農学部生に絞って分析したが、今後は全学部生を分析対象とし、学部別、男女別、出身地別（ブロック別）の傾向把握と、それらの比較分析をする計画である。

参考)

本学における地域理解教育の推進やその背後にある教育改革の状況については、香川大学大学教育基盤センター『香川大学教育研究』に詳細が紹介されている。本稿に関する主題Cや「地域と香川大学」については、拙稿「主題Cの新設と全学必修化の経緯」『香川大学教育研究（第14巻）』（pp.17-27.）、同じく拙稿「全学共通教育新カリキュラムの検証」『香川大学教育研究（第15巻）』（pp.66-69.）を参照いただきたい。